

第21回 演歌の世界に登場した シンガーソングライター

前回登場、青山学院卒のビブラフォン奏者、平岡精二が作詞作曲した『爪』（歌・ペギー葉山）は、昭和39年にレコード化されています。平岡はジャズの香りとインテリジェンスを感じさせる作家でしたが、同じ東京五輪開催の年に、平岡とは対極にあるシンガーソングライターが演歌の世界に登場しています。

「作詞・二階堂伸」と「作曲・北くすお」という2つの筆名を使った人物で、彼は昭和39年1月に『男の土俵』、9月に『花と竜』の自作曲を自ら吹き込んで、発表します。

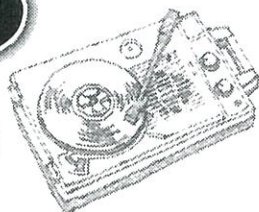
前作は柏嶋時代の盛り上げ役だった大関・北葉山をモデルにしたものだそう、私にとって北葉山といえは、もみ上げ力士の元祖のような存在でしたが、この歌で過去の相撲映像を見る際の評価が上昇しました。

火野葦平原作の『花と龍』自体は、何度も映画化されている俠客ものですが、日本テレビ系ドラマで主役の玉井金五郎を演じつつ、主題歌も歌った人物といえは、ドラマの題名村

田英雄の花と龍』からおわかりのとおり、シンガーライターの正体は、村田英雄です。

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで



堀井六郎
絵・松本浦

どちらも村田らしい野太い声で、「男の世界」と「義侠心」を気持ち良く歌い上げています。両曲共、オリジナル盤は「作詞・二階堂伸、作曲・北くすお」名義になっていますが、その後のCDや歌番組では「作詞作曲・村田英雄」という表記に変更されています。

昭和11年の頃でしょう、浪曲の住み込み修行のため、故郷・玄界灘の親元を離れ岐阜に向かったのは、村田がわずか7歳のときでした。彼の地では、朝から晩まで働きづめだったそう、おそらく学校に行く機会もなかったことでしょう。

村田から発せられる声の力強さは、単に浪曲で鍛えた喉の力だけでなく、幼い頃から養われた心の強靭さが礎になっているような気がします。音程や音楽性云々を超越した「情」のこもった声は、まさに余人をもって代えがたく、村田亡きあと、その存在と独自性を再認識することになり

ました。

書き下ろした作品群に込められた想いも同様で、おそらくそれは、現在のそのような教育制度のもとで体得できる性質のものではなく、学歴はなくとも真つ当に生きようとした少年浪曲師時代の矜持さえ感じられるものです。

自作曲ではありませんが、村田は前年の昭和38年に『柔道一代』と『姿三四郎』の柔道ものテレビドラマの主題歌を発売、東京五輪で初めて競技種目に加えられた柔道人気と相まって、テレビドラマのヒットに貢献します。

当時、大田区柔道会会長だった伯父の道場に通っていた私は、稽古帰りの火照った体で、2つの曲を小さく口ずさみながら帰路についたものでした。

東京五輪の開催年、村田は千駄ヶ谷の東京体育館で、皇太子（現天皇）の御前でこの2つの柔道讃歌を披露しています。

